

## 4. 看護学部看護学科

---

### 4.1 理念・目標

#### 4.1.1 教育理念

人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する。

#### 4.1.2 教育目標

1. 豊かな人間性と倫理観を備えた人材の育成  
人間の生命、生活を尊重し、人の痛みや苦しみを共に分かち合える温かい心、豊かな人間性と倫理観を備えた人材を育成する。
2. 看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材の育成  
看護専門職として必要な知識、技術を修得し、人々の健康と生活に関わる諸問題に対して、科学的な根拠に基づく判断力と問題解決能力及び看護学研究に関する思考力と創造性を涵養し、看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材を育成する。
3. 調整・管理能力を有する人材の育成  
保健・医療・福祉等について総合的視野を持ち、関連分野の人々と連携・協力して行われる看護実践を通して、調整・管理能力を有する人材を育成する。
4. 国際社会でも活躍できる人材の育成  
国際的な視野から、健康問題や看護問題を思考、判断し、国際社会でも活躍できる人材を育成する。
5. 将来の看護リーダーの役割を担う人材の育成  
社会状況の変化を踏まえ、看護が担うべき役割を展望し発展させるため、自らの研鑽を重ねながら、その資質向上に努め、看護学の発展に寄与し、将来の看護リーダーとなることができる人材を育成する。

#### 4.1.3 アドミッション・ポリシー（求める人材）

看護とは、「様々な健康レベルの人々が、その人らしく生活できるよう援助する仕事」です。そのため、専門的な知識・技術はもちろん、命を大切にする心や人間としての豊かさが求められます。

本学では以下の資質を有する優秀で意欲ある人材を広く求めます。

1. 大学で学ぶ上で必要とされる基礎学力を身につけている。
2. 人間や生命に関心を持ち、保健・医療・福祉分野で活躍・貢献したいという目的意識を持っている。
3. 周囲の人と協力して物事を進めることができる。
4. 他者の意見に耳を傾け、自分の考えを表現できる。
5. 自己学習・自己啓発を継続する意欲がある。

#### 4.1.4 カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）

本学では、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げる知識・技術などを修得できるように、人間科学領域の科目と看護専門領域の科目を体系的に編成しています。教育内容、教育方法、教育評価について以下のように定めています。

〈教育内容〉

学生が大学での学修に適応するための科目を初年次より配置する。加えて、人間科学・健康科学・看護学の科目間の連携を図り、それらを統合して学べるように科目を配置する。

看護専門領域に「健康・疾病・障害の理解」「看護の基本」「看護援助の方法」「看護の実践」「看護の発展」の科目を配置する。また、人間の成長、発達、健康の維持増進から終末に至る健康問題を科学的に評価し、生活・療養の場に応じた看護の必要性を学べるように設定する。

さらに、様々な状況に対応できる能力、多職種と連携・協働しながら看護の専門性を発揮できる能力、将来を切り開いていく能力を統合・発展させるための科目を段階的に学べるように設定する。

〈教育方法〉

幅広く総合的に看護を学ぶことができるよう、積極的に人々の生活の場に出向いたり、アクティブ・ラーニング、異学年交流等を活用した講義、演習、実習を適切に組み合わせた授業を行う。

個々の学習深度や能力に応じた指導を行うため、個別学習やレポート課題を課し、フィードバックを行う。

学生のより積極的な学習ニーズに応えるため、外部の客観的評価試験や外部の開講科目（放送大学、シティカレッジ等）を活用する。

学年進行に沿って、学修を統合的に積み重ねることができるよう履修指導を行う。

〈教育評価〉

各科目の学習目標の達成度を評価し、その基準は授業計画に示す。加えて、本学の履修規程・学則に基づいて総合的に評価する。

#### 4.1.5 ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

教育理念を基に本学の教育課程に沿って研鑽に努め、指定する卒業単位を修得することで、下記の能力・資質を修得・涵養し、それらを総合的に活用できる人材を養成します。

1. 看護の基盤となる豊かな人間性や倫理観と教養を身につけている。
2. 看護職として専門分野における学問内容の知識・技術を修得している。
3. 人間の身体的・心理的・社会的な健康状態を科学的に評価し、的確な判断ができる。
4. 人々の健康維持と増進、予防、また健康障害から回復過程等、全ての健康段階を連続的に捉え、生活に根ざした支援の必要性を理解できる。
5. リーダーシップを身につけ、自ら多職種と連携・協働することができる。
6. 国際化及び社会の医療ニーズの変化に対応し、生涯を通して自己を高めることができる。

## 4.2 学部学生の入学・在学・卒業の状況

### (1) 入学の状況

#### ①入学定員・収容定員

単位 (人)	
入学定員	収容定員
80	320

#### ②試験実施日

実施日	
推薦入試・社会人入試	令和 5年11月18日 (土)
一般入試前期日程試験	令和 6年 2月25日 (日)
一般入試後期日程試験	令和 6年 3月12日 (火)

#### ③受験状況等

単位 (人、倍)						
	募集定員	志願者数	受験者数	合格者数	実質倍率	入学者数
推薦入試	30	54	54	30	1.8	30(26)
社会人入試	若干名	0	0	0	0	0(0)
一般入試前期	40	87	81	43	1.9	41(37)
一般入試後期	10	134	42	14	3.0	14(13)

( ) の数字は内数であり女性の数を示す

### (2) 在学の状況 (令和6年3月1日現在)

		単位 (人)				
学 年		1年次	2年次	3年次	4年次	計
在学者数	男性	5	6	5	3	19
	女性	78	78	75	77	308
	計	83	84	80	80	327

## (3) 卒業の状況

## ①卒業者数 第21期生

		単位 (人)	
区 分	計	入学年度別卒業者数	
		令和元年度以前 入 学 者	令和2年度 入 学 者
卒業者数	74(71)	2(2)	72(69)

( ) の数字は内数であり女性の数を示す

## ②卒業後の進路状況 第21期生 (令和6年3月31日現在)

		単位 (人)					
区 分		県 内		県 外		合 計	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
就 職	看護師	40	54.1%	16	21.6%	56 (53)	75.7%
	国公立病院 (独立 行政法人を含む)	31	41.9%	9	12.2%	40 (38)	54.1%
	上記以外の病院	9	12.2%	7	9.4%	16 (15)	21.6%
	保健師	6	8.1%	1	1.4%	7 ( 7)	9.5%
	その他	0	0.0%	0	0.0%	0 ( 0)	0.0%
	計	46	62.2%	17	23.0%	63 (60)	85.1%
進 学	大学院博士前期課程	4	5.4%	0	0.0%	4 ( 4)	5.4%
	養護教諭特別別科	3	4.1%	3	4.1%	6 ( 6)	8.1%
	その他	0	0%	1	1.4%	1 ( 1)	1.4%
	計	7	9.5%	4	5.4%	11 (11)	14.9%
	未 定	0	0.0%	0	0.0%	0 ( 0)	0%
	合 計	53	71.6%	21	28.4%	74 (71)	100.0%

( ) の数字は内数であり女性の数を示す。 割合は、総数74人を100%としたもの

③主な就職先 第21期生 (令和6年3月31日現在)

県内	県外
石川県立中央病院	富山大学附属病院
金沢大学附属病院	金沢医科大学氷見市民病院
金沢医科大学病院	高山赤十字病院
JCHO金沢病院	国家公務員共済組合連合会虎の門病院
金沢市立病院	国立病院機構災害医療センター
石川県済生会金沢病院	順天堂大学医学部附属順天堂医院
公立松任石川中央病院	横浜市立大附属市民総合医療センター
やわたメディカルセンター	横浜市民病院
KKR北陸病院	滋賀県立総合病院
南ヶ丘病院	京都大学医学部附属病院
弘和会訪問看護ステーション	大阪市立総合医療センター
金沢市	神戸市立医療センター中央市民病院
白山市	常滑市 (愛知県)
宝達志水町	
志賀町	
石川県予防医学協会	

## 4.3 教育・履修体制

本学の教育は、人間科学領域の5学科目群と看護専門領域の5講座に属する教員が担当します。

領域	学科目群又は講座	科目群	教育内容
人間科学領域	人間形成系群	健康体力科学	自己の健康・体力づくりを生涯にわたり実践していくための理論と方法を修得させるとともに、看護の対象者の健康獲得を目指すための知識と技術について教授する。
	人文科学系群	哲学	哲学・心理学的な思考を通して、人間の本質と存在の意義について理解を深めさせるとともに、看護職者として悩める人を理解し援助するための知識と方法、態度について教授する。
		心理学	
	社会科学系群	社会学	人々の生活を支える社会のしくみと人間と社会環境との関わりについて理解を深めさせるとともに、社会科学的視点から保健・医療・福祉・看護が抱える諸問題について教授する。
	自然科学系群	人間工学	人々の生活と環境との関わりや人間と環境との共生について理解を深めさせるとともに、人間の日常生活行動や看護現場での諸問題について人間工学的側面から教授する。
	国際・情報科学系群		英語
情報科学			
看護専門領域	健康科学講座	機能・病態学	人間の生命現象や身体の構造・機能と心身の健康の保持・増進、疾病・障害の発症と回復のしくみに関する理論と知識、技術を科学的根拠に基づいて系統的に教授する。
		保健・治療学	
	基礎看護学講座	基礎看護学	「看護とはなにか」という看護の概念・本質と看護の基本となる理論と知識・技術、及び看護職者として必要な態度について教授する。
	母性・小児看護学講座	母性看護学	ライフサイクルのうち、妊娠・分娩・出産から思春期にわたる母子とその家族に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
		小児看護学	
	成人・老年看護学講座	成人看護学	ライフサイクルのうち、成人期から老年期にわたる対象に特徴的な発達課題と健康問題を踏まえ、看護援助に必要な知識や理論と実践の方法について教授する。
		老年看護学	
	地域・在宅・精神看護学講座	地域看護学	地域で生活する個人・家族・特定集団・地域住民全体を対象とした地域看護の特徴を踏まえ、活動の場(学校、職場、在宅、地域全体)とその対象の特性に応じた看護援助、及びライフサイクル各期のメンタルヘルスの課題や精神的な健康問題をもつ対象への看護援助に必要な知識や理論と実践の方法を教授する。
在宅看護学			
精神看護学			

## 4.4 委員会活動

### 4.4.1 常設委員会

#### 4.4.1.1 教務委員会

委員長：桜井 志保美 教授

委員：平居教授（副委員長）、垣花教授、石川教授、戸部教授、臺教授、米澤教授、美濃教授、中道准教授、中嶋（優）講師、曾山講師、千原講師、今方講師

委員補助：中嶋（知）助教、桶作助教、西助手

オブザーバー：川島学部長

事務局：河端教務学生課長、西野主事

活動内容：

<前年度までの課題>

1. 旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行措置期間であり、円滑なカリキュラム運営に努める。
2. 学生の主体的な活動やアクティブ・ラーニングの授業を実践する。新型コロナウイルス感染症状況を注視しつつ、必要に応じてオンラインを活用する。
3. 医療、社会制度の動向に沿った教育を実施するために、臨床教授等と連携、臨地実習における課題を明確にし、大学と臨床現場双方のニーズや工夫等について意見交換を行う。

<今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 新カリキュラム導入における学修効果等の評価を行う。
2. 単位認定のプロセスを見直す。
3. 異学年交流の機会を確保する。
4. 教育におけるDXの導入を進める。

<今年度の活動実績・評価>

教務の所掌業務に関して、以下の事項について審議し、活動を行った。

1. カリキュラ移行にともなう新・旧カリキュラムの学生への同質の学修の機会の提供と履修指導
2. 随時試験・定期試験の時間割と試験監督の決定
3. 時間割、教室の配置
4. 非常勤講師用の任用
5. 成績判定・修得単位および卒業要件の判定
6. 石川コンソーシアムのシティカレッジの科目提供と受講科目の成績判定
7. 臨床教授等の称号付与、臨床教授等との意見交換会
8. 特別講義の実施
9. 卒業研究に関する教員および学生配置

#### 10. 卒業研究発表会の実施

#### 11. 令和6年度看護学実習計画・実習暦

#### 12. 成績評価に関する申し合わせ事項案、履修規定案を検討し教育研究審議会に提出

－評価－

1. 新カリキュラムでは、臨床推論・臨床判断演習（2年後期）を開講した。2年次旧カリキュラムと新カリキュラムのGPAを比較すると新カリキュラムの平均GPAは、前期・後期とも低かった。これは、特に優れた成績を適切に評価判定するため成績評価の見直しを実施したことや多くの学生が能登半島地震により被災したことが関係した可能性がある。学生委員会を連携し学修支援を進めている。
2. 単位認定のプロセスに成績評価判定会議を導入した。該当期に開講された科目責任者全員で、成績評価判定を確認後、教授会に提出した。成績評価方法について、成績評価に関する申し合わせ案、履修規定案を提出し、教育研究審議会で承認され、次年度から運用予定である。
3. 異学年交流の機会を設けている科目は、HHC（ヒューマン・ヘルス・ケア）と国際看護演習である。HHCにおいて、前期では、異学年が所属している班は9班中2班のみであった。フィールド実習の最後の講義にHHC成果発表会を組み入れたところ、後期履修登録において20名の1年生が加入し、すべての班で異学年交流が可能になった。国際看護演習Ⅰは、1年生5名、2年生10名、3年生10名、4年生5名が履修した。異学年で構成するグループ分けを行い、課題に取り組み、発表を行った。異学年との交流が楽しかったと、多くの学生が感想に記載していた。
4. 1年生からペーパーレス授業を導入した。入学当初に情報ガイダンスを実施、その後も必要に応じて情報端末の機器の使用について学生支援を実施した。ペーパーレス試験実施について、前期定期試験実施結果から、図を描かせる回答用紙を提出する場合、本学の通信環境では対応困難になることが予測された。後期定期試験では、回答に図を描かせる、日本語・アルファベット以外に文字を用いる課題については、通信環境が整うまでペーパー試験での対応可とし、予定通り後期定期試験を終えた。実習記録のペーパーレス化に向け、DX記録部会を立ち上げ、検討している。基礎看護実習Ⅰについて、実習施設と調整し大きな問題なく実習を終了した。基礎看護学実習Ⅱ、Ⅳ段階実習、Ⅴ段階実習に向けて、臨床教授等との意見交換会において、記録システムの説明と意見交換会を実施した。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

- ・カリキュラム移行期間であるため、引き続き学修効果等の評価を行う。
- ・新たに導入する成績評価基準について評価を行う。
- ・国内外の活動参加や異学年交流の機会を確保する。
- ・新たに2年生がペーパーレス授業開始となるため、体制を整備する。
- ・実習記録の電子化に向けて臨地実習先と調整し、基礎看護実習Ⅱに電子実習記録を導入する

#### 4.4.1.2 学生委員会

委員長：米田 昌代 教授（学生部長）

委員：市丸准教授、松本（智）准教授、金子准教授、田村講師、大江講師、工藤講師、

## 大橋講師

委員補助：野沢助教、嶋助教、千田助教、高濱助教

事務局：河端教務学生課長、林専門員、西野主事

活動内容：

### <前年度までの課題>

1. サークル活動の活発化: コロナ禍の影響を受け、サークル数の減少、活動の低迷下が続いている。
2. 初年次学修支援ガイダンスの時期: 4月末であったため、時期としては遅かった。
3. 学生主体による大学祭開催: 参加人数が少なく、1年生の巻き込み方や学生が主体的に動けるような教員のサポートの在り方が課題である。
4. コロナ禍の影響による異学年交流の不足

### <今年度の目標・年度計画>

1. 新型コロナウイルス感染症の5類感染症への移行に伴い、新規サークル立ち上げを呼びかけたり、既存のサークルの復活を促し、サークル活動の充実を図る。
2. 学生からの初年次学修支援ガイダンスの開催時期を早めてほしいという要望を受けて、4月の初旬～中旬に実施できるよう準備する。
3. 大学祭の参加人数の増員・学生主体の運営について学生が主体的に動けるような大学祭のサポートの在り方を考える。
4. 上記1～3の活動等を通して、異学年交流がより一層進むように支援する。

### <今年度の活動実績・評価>

1. ガイダンス等において、新規サークルの呼びかけ、既存サークルの復活をよびかけた。その結果、新規サークルとして、英語サークルKENA、バスケットボールサークル、フットサルサークル、音楽サークルの4つのサークルが立ち上がり、合計10サークルが活動している。また、サークル活動が活発化するように、サークル室・体育館更衣室の整備、サークル長を集めた会議等を実施した。さらに、サークル顧問の役割について、再確認し、文書化した。活動内容としては、「看護大学子育て応援隊ひよっこ」が高松地区での子ども食堂の開催を熱望し、委員会が調整し、8月に外部団体と連携し、大学内での「夏休みハーフ学童」の開催を実現した。「災害ボランティアサークルふたば」は日頃の活動成果を能登半島震災復興ボランティア活動において発揮し、活躍している。
2. 今年度の初年次学修支援ガイダンスは4月17日に開催し、中旬までには実施できた。今年是对面で開催し、2年生3名を選出し、授業の受け方、勉強の仕方、試験対策、サークル活動、アルバイト等について1年生の事前質問に合わせて、自分の体験に基づき話してもらった。アンケートの結果から、不安が軽減し、今後活かすことができる内容であったと評価される。来年度はより速い時期の開催を目指したいと考える。
3. 大学祭においては、第24回看大祭「テーマ: 繋 (つなぐ～新たな時代を一步ずつ～)」(10月21日)の開催を支援した。模擬店やステージ企画ではかほく市の方々にご参加いただいた。約500名の方に来場いただき、盛況であった。今年度は1年生を初期から企画に巻き込んだり、決起会を開催し、士気を高め、多くの学生が参加できるように工夫した。しかし、学生の

主体性の尊重と支援教員の関わり方については継続課題である。

4. 今年度の上記1～3以外の教員が関わった異学年交流・自治会活動について以下に示す。昨年度よりは、自治会主催で新たな行事も企画され、参加人数は限られてはいたが、少しずつ、活発化してきている。しかし、今年度は2年生にリーダー的存在がいたことにより、進められたが、次年度に関しては難しい現状である。この2年生の作ってきたものをつないでいけるように支援していく必要がある。

4月 7日 新1年生歓迎会（自治会主催）自己紹介ゲーム・サークル紹介

参加人数 学生:95人、教員:7人、計:102人

4月 8日 桜ウォーク(自治会主催)→ 雨天 スポーツ大会・ビンゴ大会

参加人数 学生:55人(自治会:13人)、教員:10人、計:65人

5月29日 学生大会(自治会主催) 参加人数 学生:157人(自治会:17人)

6月29日 スポーツ大会(ドッジボール)(自治会主催)

参加人数 学生:48人(自治会:17人)、教員4人、計:52人

8月 8日 3年生と4年生の交流会(3年生実習調整委員) 進路・実習・就活

3年生58名(実習調整員含む) 4年生10名(領域別連絡委員)

11月 2日 1年生と2年生の交流会(クラス委員) 基礎Ⅱ実習前対策

1年生84名 2年生10名

12月18日 大学との座談会(自治会主催) 学生18名(自治会17人) 教職員8名

2月 1日 バレンタイン企画(生チョコ作り)(自治会主催)

学生:31人(自治会:16人)、教員:3人、計:34人

2月14日 3年生と4年生の交流会(3年生 国家試験委員7名)

3年生70名 4年生11名

3月14日・15日 3年生と卒業生のオンライン座談会(担任・さくら会)

卒業生7名 参加学生 各回3～10名 合計のべ37名

視聴回数 各回1～16回 のべ60回

3月16日 卒業生へのメッセージ集の作成、配布、掲示(自治会主催)

#### 5. その他の活動

- 1) 開学記念日(5月29日)において聖隷クリストファー大学看護学部の小池武嗣先生をお招きし、特別講演「デジタルで描く看護の未来～新しいチャレンジとチャンス」を実施した。参加人数は123名であり、1年生以外少なかったが、学生の感想には、「DX化することによって看護の質があがった」「DX化は今後の看護に活かしていけると思うと夢が広がると思った」等が記されており、学生はもちろん教員にとっても興味深く理解しやすい内容であった。午後の進路セミナーは今年は様々な分野(認定看護師・企業・開業・研究所等)で活躍している人をお呼びして企画したが、学生の参加人数が38名(後日オンライン視聴24名)とこれまでにない少なさであり、全学的に参加者を増やすしかけを作らなくてはならないと考える。学生の感想には「自分の未来にはまだまだ可能性が広がっていることをよく理解できた」「看護を自己実現の手段として何をしたいのか、改めて考え直したい」等が記されており、視野を広げることができていた。
- 2) 前年度からの継続課題である効果的な担任制度の見直しを実施した。担任制度とともに、委員会の役割・人員も見直し、改革案を作成し、次年度から実施予定である。改革のポ

イントは教授をリーダーとした1学年5名体制で4年間継続して担当すること、学生委員とは兼務せず、役割を分担し、担任に負担が大きいかからないような学生支援体制としたことである。

- 3) 卒業研究・成績優秀者、自治会活動、サークル活動、ローカルチャレンジプログラム修了等で活躍した学生に対して、卒業式にて学長表彰を実施した。
- 4) 学生自治会と教職員の座談会(12月18日)を開催し、学生の要望を聞くとともに、建設的な話し合いを実施した。要望に応えられるところ、改善すべきところ(教科書、授業方法等)については教職員に周知した。
- 5) 在学生アンケートを12月・2月のクラスアワー時に自己点検評価委員会と合同で実施し、88%(1問のみ69%)の回答率が得られた。結果から、睡眠不足、電子機器の学習以外の使用時間の長さ、アルバイト時間の多さ、課題の多さ、予習・復習時間がとれていない、大学の相談先の活用が少ないことが明らかになった。今後は学生にアンケート結果をフィードバックし、自己の生活を振り返ってもらう予定である。
- 6) 能登半島地震発災に伴い、学生の被災状況とメンタルヘルス状況の調査を実施した。その結果を各担任と共有し、被災学生を見守る体制を作った。また、経済的支援が受けられる情報についても提供し、調整した。現在も継続的にメンタルヘルス状況を確認し、支援の必要な学生の早期発見に努めている。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

1. 新担任制度実施において、スムーズな運用になるか、各担任の意見を聴取しつつ、学生相談に費やす時間の推移を評価しながら、課題を抽出していく必要がある。
2. コロナ禍前の学生活動には戻っていないため、学生の主体性を尊重しながらも、活発化していくための学生支援の在り方を考える必要がある。
3. 被災した学生の継続的フォロー。

#### 4.4.1.2.1 学生相談専門部会

部会長：米田 昌代 教授

部会員：大橋講師、河合助教、瀬戸助教、高濱助教、河端教務学生課長、小酒養護教諭

心理カウンセラー：堂本

活動内容：

##### <前年度までの課題>

1. 高校時代にコロナ禍の影響を受けた学生たちが入学してくることにより、メンタルヘルスに問題を抱えやすい学生が増える可能性がある。
2. 作成した「学生のメンタルヘルス危機対応指針」の実際の活用と課題の抽出

##### <今年度の目標・年度計画>

1. メンタルヘルスの維持向上のためには、メンタルヘルス問題の早期発見のための啓発活動、教職員に対するメンタルヘルスへの対応に関する研修、学生自身のメンタルヘルス研修等を今後企画し、対策していく必要がある。
2. 新たな保健室を中心としたメンタルヘルスへの対応がスムーズに進むように、新しく着任

する養護教諭・カウンセラーと話し合いを十分に行い、体制を整えていく。

### 3. 相談員の学生相談に関わる実態の把握（継続）

#### <今年度の活動実績・評価>

1. 教職員に対する研修は実施していないが、次年度の新年度ガイダンスの全学集会において、メンタルヘルスセルフケアについての講演を企画した。また、能登半島地震発災後の自己のメンタルヘルスの状況を知ってもらうために心理尺度を配信し、セルフコントロール、人に相談することの必要性について伝えた。コロナ禍の影響を受けた学生のメンタルヘルス不調に関しては特にみられなかった。
2. 昨年度作成した「学生のメンタルヘルス危機対応指針」に基づいて、チームが結成され、迅速に関係者と対策を講ずることができた。現在のところ教員が一人で抱え込むことはなく、チームで関わるということに関しては、スムーズな運用ではあるが、保健室を中心とした体制づくりというのは難しく、関わった教員、学生部長を中心とした体制になっている。今後、保健室・スクールカウンセラーが中心に関わっていく体制作りが継続課題である。
3. 相談員の学生相談に関わる実態の把握
  - 1) カウンセリング「ほっとルーム」を2回/月（第2木曜日：13:30～17:30、第4木曜日：14:00～18:00）の定期に開室した。カウンセリングの年間のべ相談件数は33件（1年1件、2年0件、3年11件、4年21件、大学院生0件）であり、その内の10件はオンライン面談であった。また、カウンセラーへの保健室担当者および教員の年間コンサルテーションは25件であった。
  - 2) 相談を受けた学生には、本人が情報共有を許可した教職員間（学生部長、担当教員、学年担任、学生相談部員、保健室担当者、カウンセラー、進路アドバイザー等）で連携し、継続的にサポートした。また、緊急性の高いケースでは、学生の意思を尊重しながら早期にカウンセラー・医療機関へ繋いだ。
4. その他
  - 1) 昨年作成した障がいがある学生への修学支援が実施されるまでのプロセスのフローチャート案と修学支援申請書・決定書を障がいを理由に活用する学生はいなかったが、事故・怪我等で身体的に通学・講義受講において配慮すべき事案が生じた場合も、修学支援申請書・決定書を活用して対応することとした。今年度は使用しなかったが、次年度より使用することとする。
  - 2) 学生相談部員による「ほっとルーム便り」を年間4回発行し、カウンセリングの周知、学年暦に応じた心身への健康維持に必要な情報等の発信を行った。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

1. 次年度から相談部会メンバーは縮小され、学生部長・養護教諭を中心に適宜問題のある学生に関連した担任、科目担当教員等で情報共有・支援していく形式に変更することとなった。この体制で問題となる学生の早期発見、対応に支障がないかみていく。
2. 「学生のメンタルヘルス危機対応指針」の効果的運用について継続的に取り組む。
3. 障がいがある学生への修学支援の効果的運用と課題の抽出（使用する学生がいた場合）

#### 4.4.1.2.2 進路支援専門部会

部会長：松本 智里 准教授

委員：戸部教授、濱教授、米澤教授、寺井准教授、大江講師、大西講師、日高講師

活動内容：

<前年度までの課題>

- 1) 県外だけでなく、県内の就職試験も早まっているため、3年前期から就職相談対応をしたり、就職説明会への参加を促したりして、卒後の進路に対する意識付けを早期から行う。
- 2) 低学年からのキャリア支援を継続する。
- 3) 国家試験対策の1つである強化学習を希望者も含み行う。

<今年度の目標・年度計画>

- 1) 希望とする進学・就職先の受験・内定ができるよう支援する。
- 2) 国家試験で学生の力が最大限発揮できるよう学習支援、学習環境調整を行う。
- 3) 卒後の進路に対する意識付けを早期から行うため、全学年へのキャリア支援を行う。

<今年度の活動実績・評価>

##### 1) 進路支援

- ①4年生への進路支援は、8名のアドバイザー教員による担当制で行った。
- ②県外を就職希望する学生には、3年後期から進路支援アドバイザーによる支援を行った。
- ③4年生74名全員の就職・進学先が決定した。

##### 2) 国家試験対策：看護師国家試験合格率100%、保健師国家試験合格率100%

- ①4年生が主体となって、模擬試験の年間計画立案、実施を行った。感染対策や大雪を想定して冬季の模試試験の実施方法をオンラインとした。能登半島地震により、1月開催の模試が受験不可となったが、オンライン対応としたことと、被災した学生には受験締め切りを伸ばしたことで、希望者は全員受験できた。
- ②進路アドバイザーが模試試験結果をもとに個別に支援をした。
- ③強化学習として、模試試験の成績不良者と強化学習の参加希望者を対象に、学習方法の支援、必修問題、一般・状況設定問題への強化を図った。
- ④国家試験6日前に、教員が作成した必修問題を用いて試験を実施した。
- ⑤4年生を対象に、看護師対策3回、保健師対策2回の補習を行った。

##### 3) 全学年へのキャリア支援

- ①5月29日の開学記念日に「様々な分野で活躍する先輩の話を聞き自分の進路に活かそう」をテーマに、卒業生を含む5人の講師に講演していただいた。60名程度の参加があり、病院で勤務する看護師以外にも看護職として様々な分野で活躍できる可能性があることと理解できたことがアンケート結果から得られた。
- ②マイナビ看護学生による講座

##### 【就職支援ガイダンス】

6月22日（木）13時～14時半 本学大講義室 参加者：3年生80名、教員8名

2月14日（水）11時～12時 本学大講義室 参加者：3年生77名、教員12名

前年度は初回の就職支援ガイダンスを8月に行っていたが、夏季休暇期間に多くの施設で開催されるインターンシップや就職説明会に参加することを推奨するために、今年度は6月の開催とした。全国規模で学生の就職支援をしている外部業者にガイダンスを依頼することで、県内だけでなく全国の就職活動の動向を学生に伝えられた。

#### 【キャリアデザイン講座】

2月9日（金）14時45分～16時10分 参加者：1年生80名、教員5名

今年度の新たな取り組みとして、低学年から自分のキャリアについて意識してもらうために、キャリアデザイン講座を導入した。講義後にストレートマスターのすすめの動画を視聴した。自己分析の重要性や低学年からキャリアを見据えることの必要性を実感していることがアンケート結果から得られた。

③3年生を対象に低学年模試を実施した。

- ・第1回 7月20日（木）9～12時 本学大講義室 参加者：3年生82名
- ・第2回 2月14日（水）～3月14日（木）第112回看護師国家試験問題に取り組んだ。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

- 1) 3年後期からの就職支援を継続する。県外就職者だけでなく、県内施設の魅力も周知できるように座談会などを利用する。
- 2) 卒後の進路に対し、低学年から意識しつつあるので、低学年からのキャリア支援を継続する。
- 3) 国家試験対策の1つである強化学習を希望者も含み行うことを継続する。

### 4.4.1.3 研究推進委員会

委員長：峰松 健夫 教授

委員：石川教授、濱教授

事務局：長谷川主幹

活動内容：

#### <前年度までの課題>

1. 科研費等外部研究費獲得の拡大
2. 研究報告会・交流会等の対面開催

#### <今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 研究ウェルカムセッション

昼休み時間帯を利用して、全教員参加の下、本年度着任の教員（講師以上）がこれまでの研究活動を紹介する。

2. 学内研究助成成果報告会

昨年度末で終了した学内研究助成による研究成果を対面形式のポスターセッションで発表する。

3. 石川県立大学・県立看護大学合同研究発表会

石川県立大学および本学の教員の研究発表、ならびに両大学による共同研究の正解発表を行う。

#### 4. 科研費申請支援

科研費に申請する教員のうち希望者を対象に、申請課題のトピックに関するディスカッション、および申請書のレビューを行う。

#### 5. 研究助成金申請支援

申請締切の近い民間団体等の研究助成金情報の一覧を作成し、定期的に配信する。また、希望者には科研費申請支援と同様の支援を行う。

### <今年度の活動実績・評価>

#### 1. 研究ウェルカムセッション

日時：令和5年6月5～6日 12:15～12:55

形式：Zoomによるライブ配信

演題：米澤洋美教授（地域看護学）：団塊世代男性を対象とした定年退職後の再就労の場における介護予防プログラム構築、臺美佐子教授（成人看護学）：がんサバイバーのウェルビーイング向上を目指して～リンパ浮腫研究のこれまでとこれから～、戸部浩美教授（小児看護学）：Enhancing family resilience in the Community、長谷川陽子共同研究講座准教授（共同研究講座看護理工学）：看護理工学を用いた栄養モニタリング方法の確立、佐能唯講師（人間科学）：転倒リスクに関する病的跛行及び加齢に伴う歩行特徴量抽出

#### 2. 学内研究助成成果報告会

日時：令和5年5月4日 13:00～14:00

形式：対面形式によるポスター発表

演題：石川倫子教授（基礎看護学）：新人看護師の入職後1年間におけるコミュニケーション能力の変化と影響要因、今井秀樹教授（健康科学）：高齢化が進む地域に居住する住民の健康状態を決定する様々な要因とその複合影響の検討、岩佐和夫教授（健康科学）：筋細胞内オルガネラにおける免疫制御因子発現調整機構の解明、岩佐和夫教授（健康科学）：筋芽細胞の分化過程における免疫制御因子発現と外部誘導因子の解明、牛村春奈助手（在宅看護学）：在宅Parkinson病療養者の低栄養状態予防に向けた舌・咀嚼機能と接種栄養に関する研究、紺家千津子教授（成人看護学）：PROGを活用した本学学部生との教育評価と課題の探求、池上暁（院生）・牧野智恵教授（成人看護学）：便秘のある進行がん患者をケアする訪問看護師の困難感の経験、天日更織（院生）・瀧澤理穂助教（成人看護学）：新型コロナウイルス感染症の感染拡大における終末期がん患者家族の経験、額奈々助教（老年看護学）：就寝前の足浴による認知症高齢者の夜間睡眠への影響（予備的調査）、平居貴生教授（健康科学）：Fibroblast growth factor (FGF21)、平居貴生（健康科学）：生物時計システムと骨代謝の機能連関に関する基盤研究、松本郁海（院生）・金谷雅代准教授（小児看護学）：AYA世代がんサバイバーの雇用促進に関連する事業所側の要因、宮田広成（院生）・塚田久恵教授（地域看護学）：アルコール依存症者が断酒会継続参加に至る逡巡過程

#### 3. 石川県立大学・県立看護大学合同研究発表会

日時：令和5年9月22日 14:50～17:10（合同FD研修会に続けて開催）

形式：対面形式による口頭発表

演題：東出大志講師（石川県立大学）：自動撮影カメラを通して観る野生動物の現状と生態、  
中嶋優太講師（人間科学）：西田『善の研究』前後の新資料からみた自由論、宮島俊  
介講師（石川県立大学）：植物の根の形成を制御する分子メカニズムの解明、大貝和  
裕共同研究講座教授（共同研究講座看護理工学）：細菌叢からアプローチする褥瘡再  
発予防、宮口和義教授（石川県立大学）・垣花渉（人間科学）：両大学共同 研究足元  
から見直す姿勢改善プロジェクトー草履サンダル導入による姿勢・歩容の変化ー

#### 4. 科研費申請支援

- A. トピックディスカッション：23名24回のディスカッションを実施
- B. 申請書レビュー：レビューアー 9名で9件の申請書をレビュー
- C. 科研費申請実績：申請課題数39、採択課題数16、採択率41.0%

※選考中の挑戦的研究2件を除く

#### 5. 研究助成金申請支援

令和5年5月以降、毎年研究助成金情報を全教員に発信した。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

科研費等の申請支援においては、特に准教授の申請および挑戦的研究への申請の支援に重点を置き、さらなる採択率向上に努める。

#### 4.4.1.3.1 学内研究助成専門部会

委員長：垣花 渉 教授

委員：峰松教授、桜井教授

事務局：長谷川主幹

活動内容：

本部会は、学内研究助成全般のあり方の検討、学内研究助成に関する申請書類の審査、報告書の評価、予算案の提案を主たる活動とする。

学内研究助成に関する申請書類の審査を2回行った。令和5年3月に令和5年度学内研究助成（研究プロジェクト）第1期の募集を行った。採択件数は6件であった（申請7件）。令和5年9月に令和5年度学内研究助成（研究プロジェクト）第2期の募集を行った。採択件数は6件であった（申請6件）。

令和5年6月に1件、10月に1件、令和6年3月に3件の令和5年度学内研究助成（研究成果公表）の申請があり、5件承認された。

令和5年8月に1件の令和5年度学内研究助成（学会開催助成）の申請があり、1件承認された。

#### 4.4.1.4 石川看護雑誌編集委員会

委員長：濱 耕子 教授

委員：今井（秀）教授、紺家教授、米澤教授

委員補助：瀬戸助教、桶作助教

事務局：中村主幹兼係長、外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

外部査読制をとらない、且つ本投稿論文が博士論文の申請条件でなくなった本誌は、学術論文としての存続が難しく、大学院生や教員を筆頭とする応募が減少すると予想された。

本誌の新たなあり方について、具体的な対策1)～3)の視点から検討する必要がある。

- 1) 学部生など応募対象の拡大
- 2) 査読体制や投稿スケジュールの見直し
- 3) 論文形態の選択肢を増やす

#### <今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 新たなあり方を踏まえた本誌の発刊が無事に終了する。
2. 本誌の新たなあり方と対策について昨年度に引き続き意見交換を行い、共有する。
3. 本誌への投稿が円滑に行えるよう、投稿規定等の見直しを図る。

#### <今年度の活動実績・評価>

1. 「石川看護雑誌」(第21巻)が本誌の新たなあり方を踏まえて発刊された。

本学独自の活動のアピールになるように、原著論文以外に総説や資料、研修活動報告等による依頼原稿を含め、積極的に投稿を受け入れる方向で進めた。

具体的には、卒業生を筆頭とする卒業研究の内容で原著論文3編、依頼原稿として海外視察と本学の地域貢献事業報告による資料2編の計5編を掲載した。依頼原稿への査読はせず、委員長による校正作業で進めた。予定通り、第21巻は3月末に発刊された。

2. 本誌の新たなあり方と対策について図書館長と編集委員会で検討し、共有した。

- ・視察関連や研修活動等(フィールド実習やヒューマンヘルスケア含む)、最新の学術情報やトピックの発展的な報告を依頼原稿として受け入れる。
- ・依頼原稿の場合、査読は課さない。そのため、投稿スケジュールは通常原稿より遅く開始したり、各締め切りを臨機応変に調整する。
- ・論文形態は、総説、原著論文、資料のままとする。

3. 投稿規定等の見直しについて

第1回編集委員会(7月26～28日のメール会議)にて、検討した本誌の新たなあり方と対策に沿って、発行規定ならびに投稿規定を見直した。

8月4日に改訂作業を終え、9月5日の教育研究審議会にて石川看護雑誌編集委員会規程を添え、発行規定ならびに投稿規定改訂の承認を得た。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

今後は、石川県内看護職の人材育成や看護の質の向上に役立つ報告等、より多くの現場での取り組みについて掲載できるように検討する。例えば、本学附属の地域ケア総合センター、看護キャリア支援センター事業では次年度から本誌資料での報告を推奨している。これに合わせて、石川看護雑誌編集委員会規程、発行規定ならびに投稿規定についても改訂が必要になってくる。

本誌の配布先や配布数についても、本誌の新たなあり方や掲載内容から検討していく必要がある。

#### 4.4.1.5 情報システム委員会(含む情報セキュリティ)

委員長：峰松 健夫 教授

委員：市丸准教授、佐能講師、中嶋(知)助教

事務局：外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

本学のDX推進に連動し、LMSやメールシステム、ファイルサーバーへのアクセシビリティ等について検討、対応、および周知に努める。また、情報システム機器更新に伴う各種調整、対応、教育等を行う。

<今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 教職員を対象とした情報セキュリティ研修
2. 学生を対象とした情報セキュリティ教育
3. 情報資産管理システムによるソフトウェア・ライセンス及び情報機器の適正な管理
4. Moodleの運営・管理のサポート
5. サンダーバードに代わるメールシステム導入のサポート

<今年度の活動実績・評価>

1. 教職員を対象とした情報セキュリティ教育を動画のオンデマンド配信にて行った。
2. 令和5年4月4日 市丸委員(本学Moodleマネージャー)が教職員および大学院生を対象としたMoodle研修会を開催した。
3. 本年度より実施されているDX化に伴うWi-Fi通信速度に関する問題提起を、教務委員会およびDX推進委員会と強調して行った。
4. LMSを用いた講義資料掲載における著作権の注意事項を整理し、周知を行った。
5. Microsoft365のアカウント更新、およびメースシステムの変更のサポートを行った。

<次年度以降に向けた課題・発展>

本学におけるDXのさらなる推進に伴い、通信環境やファイルサーバーへのアクセシビリティ等について、実態の把握、改善の検討、および適正な使用方法等の周知に努める。

#### 4.4.1.6 広報委員会

委員長：平居 貴生 教授

委員：真田学長、川島教授(学部長)、小林教授(研究科長)、米田教授(学生部長)、岩佐教授(附属図書館長)、塚田教授(附属地域ケア総合センター長)、紺家教授(附属看護キャリア支援センター長)、桜井教授、中道准教授、曾山講師、中嶋(優)講師、大西講師、大橋講師、瀬戸助教、後藤助教、中村事務局長、小幡アドミッションアドバイザー

事務局：久保石専門員

活動内容：

## 1. 次年度以降に向けた課題・発展

- 1) ポストコロナ時代のオープンキャンパス開催方法を検討する
- 2) 高校生が利用しやすいHPに改修する
- 3) YouTubeチャンネルの動画コンテンツを充実させる

## 2. 目標・年度計画

- 1) 参加型オープンキャンパスの開催
- 2) 大学ホームページの改善

## 3. 今年度の活動実績・評価

### 1) 夏のオープンキャンパス

日時：7月15日（土）9時40分～13時30分

参加者：対面355名（保護者94名を含む）

- 4年ぶりの対面オープンキャンパス開催であった
- オープンキャンパスグッズの作製（水、ボールペンなど）
- 大学説明会（学長挨拶、学部長による入試制度の説明）
- 模擬講義（松本勝准教授）
- 学生によるキャンパスライフの紹介
- 看護体験×ミニ模擬講義（看護系の実習室、スキルラボで体験や見学）
- 個別相談コーナー（高校生対象）
- 個別相談（保護者対象）
- 研究ミニイベント（事前予約）
- 施設見学（語学演習室、情報処理室、図書館、スキルラボなどを開放）

### 2) 秋のオープンキャンパス

日時：10月14日（土）9時30分～12時

参加者：対面151名（保護者58名を含む）

※夏と同様に対面での開催であった

### 3) キャンパスネットIPNU（大学新聞）

#### ①第43巻（2023年5月号の編集・発行）

単科大学でありながら多様な研究に取り組む本学の大学院の魅力を伝えるため、特集は「創ろう！看護のミライ」をテーマに各分野の研究内容の紹介記事を掲載した。

#### ②第44巻（2023年11月号の編集・発行）

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、人と人との交流が活発さを取り戻す中で、「今ふたたび ふれあいを大切に、学生生活を！」と題した特集を掲載した。

### 4) 大学案内（学部・大学院）広報誌の発行

#### ①2024大学案内の企画立案・編集・発行

#### ②2024広報誌の企画立案・編集・発行

### 5) ホームページ

受験生をメインターゲットとして、より使いやすく、かつ、スマートフォンで閲覧した際に見やすくなるよう構成等を全面的に改修した。

### 6) 大学コンソーシアム石川

#### ①広報事業：石川の大学ガイドブック「イシカレ」編集に協力

②出張オープンキャンパス事業（野々市明倫・門前・星稜・金沢錦高等学校）

③「学都石川」高校教員向けキャンパスツアー受け入れ

10月4日（7名受け入れ）

7) その他の広報活動

①大学・大学院PRポスターの作成

②大学PR動画の作成（大学公式YouTubeチャンネルに追加）

#### 4.4.1.7 入学試験委員会

委員長：真田 弘美 教授（学長）

委員：紺家教授（副委員長）、川島教授、小林教授、今井（秀）教授、平居教授、亀田教授、市丸准教授、中村事務局長

事務局：河端課長、藏谷主任主事、小幡アドミッションアドバイザー

活動内容：

<前年度までの課題>

- 1 令和8年度以降の入学者選抜試験における「情報」科目の本学の利用に関して
- 2 学部と大学院の受験者増に向けた対策の強化

<今年度の目標・改善点・年度計画>

- 1 学部と大学院共に、受験者増に向けた入試改革と広報活動を図る。
- 2 今年度より実施した学校推薦型選抜の1校当たりの推薦者数の増加の評価をする。
- 3 その他の入試委員会が担当する役割を確実に挙る。課題を発見し、その解決につなげる。

<今年度の活動実績・評価>

- 1 学部と大学院共に、受験者増に向けた入試改革と広報活動

1) 学部

- ・令和8年度入学者選抜試験における共通テストの科目と配点、および個別学力試験等を見直した。
- ・入試面接評定票の評価項目をさらにアドミッションポリシーに合致するように見直した。
- ・アドミッションアドバイザーによる高校訪問に加え、高校での進路ガイダンスや合同進学説明会に入学試験委員会委員を派遣した。
- ・大学説明会及び意見交換会を8月1日に実施し、北陸3県の高校教諭29名の参加があった。
- ・石川コンソーシアムによる「高校教員向けキャンパスツアー」事業にて、県外の高校教諭7名を対象に入試委員会にて本学の特徴を説明した。

2) 大学院

- ・令和6年度実施の入試から、学内選抜と学外選抜を一本化とし、入試科目を見直した。また、今年度より早期に入学生を確保するために受験時期を9月から8月とした。

- 2 今年度より実施した学校推薦型選抜の1校当たりの推薦者数の増加の評価

- ・21校より応募があり、内6校より4名以上受験者し、倍率は前年より0.2ポイント上昇した。

- 3 本年度の本学の学部入試、大学院入試また大学入試共通テストにおいて、入試実施にかかわる重大なトラブルはなかった。また、令和6年能登半島地震があったことより、入試にお

ける地震対策マニュアルを共通テスト用と前期・後期日程用で作成し、運用した。

＜次年度以降に向けた課題・発展＞

- 1) 看護学部受験者増に向けた本学の独自性の創出
- 2) 大学院受験者の開拓

#### 4.4.1.7.1 入試実施部会

部会長：非公開

部会員：非公開

活動内容：

1. 看護学部入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
2. 研究科入学試験の準備・実施体制およびそれに付随する業務
3. 大学入学共通テストの会場準備・実施体制およびそれに付随する業務
4. 看護キャリア支援センターが実施する感染管理認定看護師教育課程入学試験の実施支援

#### 4.4.1.7.2 入試評価部会

部会長：市丸 徹 准教授

部会員：非公開

活動内容：

＜前年度までの課題＞

- ・「情報」科目の本学入試への導入を判断するための指標を検討する。
- ・本学の推薦・社会人入試、一般入試における面接試験の点数配分の変更に伴う合格者への影響を把握し、評価する。

＜今年度の目標・改善点・年度計画＞

- ・本学の学部入試における面接の評価方法について、入試委員会から見直すように指示を受けた。これまではA～D評価とし、それぞれに配点していた（内訳は非公開）。これにより合否が学力点から逆転しうること、ブロック評価に点数を付すことは不適切との議論があり、令和5年度（令和6年度入試）からは点数評価に変更することとなった。これに伴い部会にて、配点基準や評価方法を検討することとなった。
- ・本学の入試における「情報」科目の利用については、県下高校の教育体制が整ってきた時点での再検討となるが、入試委員会からの指示はなく、令和5年度における部会の目標からは除外された。

＜今年度の活動実績・評価＞

- ・5月15日、23日、31日、6月8日の4回、対面での部会会議を開催した。第1回では部会での年度目標を説明し、面接試験の問題点、改善点について意見交換を行った。第2回ではアドミッションポリシーと面接評価基準との対応および配点案を検討した。第3回では新しい評価基準に相応する質問例を議論し、面接評定票の改訂にも着手した。入試委員会での確認を挟み、第4回では面接評定の流れについても整理し、面接実施要領を改訂した。

- ・推薦社会人入試、一般前期入試における面接の実施と、面接官からのフィードバックをもとに、面接評定票を適宜改訂した。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

- ・面接方法と合格者の入学後の成績との関係については、入試委員会、IR評価部会にて引き続き解析が求められる。
- ・入試評価部会は令和5年度をもって解散される。

#### 4.4.1.8 自己点検・評価委員会

委員長：真田 弘美 教授（学長）、岩佐 和夫 教授（委員長代行）

委員：今井（秀）教授（副委員長）、今井（美）教授（副委員長）、金子准教授（年報編集部会長）、川島教授（副委員長、学長補佐）、小林教授（研究科長）、紺家教授（学長補佐、看護キャリア支援センター長）、桜井教授（教務委員長）、塚田教授（地域ケア総合センター長）、中村事務局長、濱教授（教員評価部会長）、松田准教授（IR推進部会長）、美濃教授（FD委員長）、米田教授（学生部長）、

委員長補助：河合助教、後藤助教、瀧澤助教

事務局：外主事

委員会開催頻度：5月、7月、9月、11月、2月、3月 計6回開催

活動内容：

#### <前年度までの課題>

- 1) 大学基準協会における大学評価で示された改善課題報告書の提出（2023年7月末まで）
- 2) 公立大学評価機構における大学評価（2026年）に向けた本学における取り組みの評価と報告書の作成準備
- 3) 学生委員会、FD委員会、PROG調査の結果評価と学習成果改善に向けた方策を検討
- 4) 単年度教員自己評価の試行と施行後評価
- 5) 本学のIR活動の推進と探究
- 6) 年報における個人業績の明確化と大学自己評価としての活用
- 7) 第3期中期計画における令和5年度計画の実施

#### <今年度の目標・改善点・年度計画>

- 1) 大学基準協会における改善課題報告書の提出
- 2) 公立大学評価機構における大学評価（2026年）に向けた報告書の作成準備
- 3) 学生委員会、FD委員会と協働して学生アンケート実施
- 4) 単年度教員自己評価の試行と自己評価報告会の開催
- 5) 本学のIR活動の推進
- 6) 年報における個人業績の明確化と大学自己評価としての活用
- 7) 第3期中期計画における令和5年度計画の実施

#### <今年度の活動実績・評価>

- 1) 大学基準協会における改善課題報告書の提出（2023年7月）  
学部・院の学位授与方針に定めた学修成果の測定・把握方法及び活用法の改善および内部質検証委員会の提言に対する活動内容をまとめた報告書を2023年7月に提出し、大学基準協会より2024年2月21日付けで結果が通知された。
- 2) 公立大学評価機構における大学評価（2026年）に向けた報告書の作成準備  
公立大学評価機構における大学評価に向けた評価項目の確認とこれらの項目に関する年報の記載事項を確認した。
- 3) 学生委員会、FD委員会と協働して学生アンケート実施  
教育の内部質保証の確保と評価を行うため、学生委員会、自己評価委員会にて在学学生および卒業生アンケートを行った。  
FD委員会における授業アンケートについても実施し、教授会で内容を評価し、各教員へのフィードバックを行った。  
外部機関によるジェネリックスキルのアセスメントテスト（PROG調査）を行った。
- 4) 単年度教員自己評価の試行と自己評価報告会の実施  
教員の評価を数値化し目標設定を明確にするために、自己評価にエフォート率、KGI・KPIを取り入れた単年度教員自己評価方法を試行した。自己評価の根拠および2023年度の目標設定のためのメンターとの面接、学長評価と面談を実施した。さらに研究・教育・社会貢献報告会を2023年5月22、29日および2024年3月6日に行った。
- 5) 本学のIR活動の推進  
IRにおけるデータ利用に関し学部4学年にIR活動での学内データ使用について説明を行い、書面での同意書を取得した。取得率は約8割であった。
- 6) 年報における個人業績の明確化と大学自己評価としての活用  
年報の記載方法を講座ごとにまとめ、個人業績の明確化を行った。また、公立大学評価機構の評価項目に準じた年報の作成を行った。
- 7) 第3期中期計画における令和5年度計画の実施

#### 【3つのポリシーの検証】

- ① 時代が求める看護職者の人物像を調査し、アドミッション・ポリシーの検証を行う。
- ② 卒業生がカリキュラム・ポリシーに沿った教育が受けられ、ディプロマ・ポリシーに掲げた資質や能力を備えているか調査し、見直しにつなげる。
  - ・ 12月に在学学生に対し学生生活に関するアンケートを実施した。アンケート結果よりアドミッション・ポリシーに順じた学生の入学を確認し、ポリシーを継続することとした。
  - ・ 入学時の成績やその後の学力や自律性等の調査について、12月に学生にデータ使用の説明を行い、同意書を取得した。IR部会が中心となりデータのクリーニングを開始した。
  - ・ 2月に卒業生に対しアンケートを実施した。その結果からディプロマ・ポリシーに掲げた資質や能力を備えていることを確認した。

#### 【ディプロマ・ポリシーの在り方の検証】

- ① アンケート調査等によりディプロマ・ポリシーに定めた学修成果を把握し、教育現場へフィードバックする。
  - ・ 2月に卒業生に対し行うアンケートを実施した。この結果を3月7日の自己点検・評価委員会にて卒業生に対する学修成果を確認し、情報を共有化した。

- ・ 3月4日に石川県内の医療機関の看護部、看護協会、高等学校校長会の委員等を交えた懇談会を開催し、本学および卒業生に求められる資質に関する聞き取りを実施した。

#### 【時代に即したポリシーの見直し】

- ① 大学院の教育理念と時代に即した看護職者、教育・研究者の育成を踏まえ、アドミッション・ポリシーの検証を行う。
- ② 修了生がカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーで掲げている資質や能力を備えているか調査し、検証する。
  - ・ 大学院の在り方とアドミッション・ポリシーとの整合性を大学院教務委員会、将来構想委員会、教育研究審議会にて協議し、ポリシーは継続していくが、見直しについても継続して検証を行うことを確認した。
  - ・ 大学院における論文審査を振り返り客観的に評価するため審査の内容の審議を2月16日の研究科委員会にて行い、各論文審査委員会にて指導内容や指摘事項が修了生の能力の評価において適切であったことが確認された。
  - ・ 2月19日に修了生に対するアンケート調査を実施した。

#### 【ディプロマ・ポリシーのあり方の検証】

- ① 修了生へのアンケートやヒアリング等を通して、大学院の教育成果を検証し、必要に応じて教育内容を改善する。
  - ・ 2月19日に修了生に対するアンケート調査を実施した。その結果に基づき大学院教務委員会、将来構想委員会、教育研究審議会にて教育内容の検証を行い、R6年度以降の教育内容は継続していくこととした。

#### 【アンケートを活用した評価体制の充実化】

- ① 学生への授業評価アンケート、卒業生・修了生・就職先等に対するアンケートの分析結果を教員にフィードバックし、教育の質の向上につなげる。
  - ・ 学生に対し授業アンケートを実施、アンケート結果を9月7日および3月18日の教授会で提示した。学生の授業への満足度は各教科とも8-9割と高く、今後もわかりやすい授業に務めることを確認した。
  - ・ 学生への他のアンケートについては12月に、卒業生・修了生へのアンケートは2月に実施し、3月7日の教授会および自己点検・評価委員会にて内容を教員へフィードバックした。各教科の課題が多く、睡眠時間が削られている実態が明らかとなった。アンケートの結果の一部は学生にもフィードバックすることとなった。
  - ・ 学生の生活における問題点、授業への取り組み状況、就職情報や指導の満足度、ディプロマ・ポリシーの達成度等の分析結果を教員および学生にフィードバックを行った。

#### 【教員評価制度の活用、適材適所の人事】

- ① 教員自己評価の方法を見直し、単年での評価方式を試行し、適材適所の人材配置につながるかを検証する。
  - ・ 単年度教員自己評価について全教員が目標およびエフォート率を設定し提出を行った。
  - ・ 自己評価の結果および業績の達成度を検証し、3月6日の研究・教育・社会貢献報告会にて発表を行った。また、「適材適所の人材配置」の検討を学長・学部長を中心として実施し、R6年度の各委員会の人材配置を行った。

#### 【教員へのインセンティブ制度】

- ① インセンティブを与える基準について検討する。
- ・ 単年度教員自己評価の結果を踏まえ、インセンティブについて11月9日、3月7日の自己点検・評価委員会において協議を行い、優秀な教員に対し表彰を行うこととした。インセンティブを与える基準については引き続き検討していくこととした。

【各評価結果の反映、運営の改善】

- ① 自己点検評価、認証評価機関による評価、石川県公立大学法人評価委員会による評価結果を、大学運営の改善に活用する。
- ・ 石川県公立大学法人評価委員会が行う法人評価の指摘について、教育研究審議会、自己点検・評価委員会および研究科委員会にて情報を共有し、教員の資質について真摯に受け止め、教員の採用基準を明確にし、人間科学講座・健康科学講座教員のキャリアアップの基準を文書化した。
  - ・ 大学院の指導教員が必要とする論文数（査読あり3本以上）を明確化した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- 1) 公立大学評価機構における大学評価（2026年）に向けた本学における取り組みの評価と報告書の作成準備
- 2) 学生委員会、FD委員会、PROG調査の結果評価と学習成果改善に向けた方策を検討
- 3) 単年度教員自己評価の施行と評価
- 4) 教員の研究・教育・社会貢献の報告会開催
- 5) 本学のIR活動
  - ・ 入試形態と成績の関連についてのデータ分析と結果報告
  - ・ IRや自己点検評価委員会外からの分析依頼への対応の規則決め
  - ・ IRデータの使用・借用依頼などに対する規則決めと受付体制の構築
  - ・ R6年度以降、同意書を取るタイミングと実施者（R5年度は松田が実施）
- 6) 年報における個人業績の明確化と大学自己評価としての活用
- 7) 第3期中期計画における令和6年度計画の実施

#### 4.4.1.8.1 教員評価部会

部会長：濱 耕子 教授

部会員：寺井准教授

活動内容：

<前年度までの課題>

1. 新単年評価の仮試行状況を評価する目的で全教員にアンケートを行い、2024年度の評価実施、その後の改訂により評価のあり方を見直す。
2. 1次評価者との相談体制をしくことで、講座での関係構築や業務の円滑な進行等の波及効果が期待される。仮試行後の評価に活かしていく。

<今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 新単年評価の仮試行状況に関して、全教員にアンケートを行う。
2. 実施年度に向けて仮試行のアンケート結果や試行時の課題を踏まえ、新単年評価シートの

検討を行う。

#### <今年度の活動実績・評価>

1. 新単年評価の仮試行状況を振り返り、評価する目的で全教員にアンケートを行った。

11月下旬～12月初旬にアンケートを実施し、12月全体会議にてアンケートの結果報告を行った。

評価シートの記載例の理解しやすさは普通を含め計6割、1次評価への負担感は2～3割にとどまった。評価による教員の意識変化として「講座や1教員としての役割を考える機会となり良かった」ことや「評価を経験して慣れてきた」ことから、次年度は現在の方法で評価を実施することへの承認が得られた。

2. 実施年度に向けて仮試行のアンケート結果や試行時の課題を踏まえ、新単年評価シートの検討を行う。

4月の全体会議時に、試行版では目標設定・認証が4～5月になる旨の説明を行った（仮試行版の際は、仮評価案決定後の年度末の2月であった）。

仮試行のアンケートでは、評価領域「教育・研究支援」の記載が難しいと3分の2の教員が回答し、その理由に「教育、研究、社会貢献の評価領域と重なる」、「研究支援の対象に講座で指導対象となる教員や院生も含めるのか」という意見があった。そこで、2024年2月の試行版1次評価案内時には、評価領域「教育・研究支援」に関する目標設定（KGI、KPI）についてどのような立場で関わるか、職位や状況別に具体例をいくつか提示した。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

1. 新単年評価の実施と改訂（評価体制の構築）

実施状況の検証と改訂に取り組み、KGI・KPIおよび講座の指導者や学長による1次評価により、目標達成率を更に高められるよう評価体制を構築する。

2. 教員評価結果の活用や教員評価データベースシステム化の可能性の検討

自己点検・評価委員会や学長の責任において、大学内の人事管理や配置、大学間・施設間協働・連携のために人材ポートフォリオとしての戦略的な活用可能性について検討する。

#### 4.4.1.8.2 年報編集部会

部会長：金子 紀子 准教授

部会員：中嶋（知）助教、額助教

事務局：外主事

活動内容：

##### <前年度までの課題>

- ・新様式を活用した講座単位での教員業績となるため、校正依頼等が円滑となるよう進める必要がある。

##### <今年度の目標・改善点・年度計画>

- ・教員業績の校正は、講座単位で依頼した。とりまとめ教員によるデータ形式での提出を基本とし、校正編集作業の効率化を図った。

#### <今年度の活動実績・評価>

- ・年報第23巻（令和4年度）の発刊。
- ・年報第24巻（令和5年度）の発刊に向けた原稿依頼では、委員会活動の原稿が統一されるよう留意事項の内容を見直し、周知した。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

- ・各委員会の活動内容が統一された年報第24巻が発刊される。このほか必要に応じて、年報の内容、原稿依頼の方法等を検討する。

### 4.4.1.9 FD委員会

委員長：美濃 由紀子 教授

委員：大西講師、田村講師

事務局：藏谷主任主事

活動内容：

#### 1. 新入職員のオリエンテーション

新入職員に対して、本学の学部・大学院教育および研究、地域ケア総合センター、看護キャリア支援センター、図書館についてのオリエンテーションを行った（4月、10月）。学部・大学院教育のオリエンテーションは対面で実施し、その他のオリエンテーションはオンデマンド型の動画視聴による受講とした。個人のスケジュールに合わせて視聴が可能であった点や再視聴できる点において、受講者からはより理解しやすかったという声が聞かれた。

#### 2. 教員の【教育力の改善と向上】のためのFD研修

##### 1) 県立大学との合同FD研修会

石川県立大学との合同FD研修会：2023年9月22日（金）に対面にて開催した。テーマは、「大学教育におけるChatGPT等の生成系AIへの対応を考える」とし、石川県立大学の本多裕司教授に「石川県立大学の教員が考える生成系AIとの付き合い方」について話題提供をいただいた。その後、合同のグループディスカッションを行った。研修会の参加者数は、県立看護大23名、県立大30名の計53名であった。評価アンケートの回答数は40名、回答率は75%であり、回答者の約80%が満足と回答していた。ChatGPT等の生成系AIへの対応については、両大学の教員の共通する懸念事項であったことから、各職位の立場からディスカッションできたことが効果的であったと評価できた。

##### 2) 教育力向上のためのFD研修会

FD委員会主催（学長企画）によるFD研修会：2023年12月1日に全教職員対象として対面にて開催した。「人類の持続的発展の科学」というテーマにて、公立小松大学顧問の林勇二郎先生よりご講演をいただいた。参加者数は、教員45名、事務職員4名の計49名であり、評価アンケートの回答数は40名、回答率は84%であり、回答者の約78%が満足と回答していた。中でも、普段我々が意識することの少ない看護とは異なる壮大なビジョンから大学の組織的な教育をインクルージブに捉えるための指針を得るのに貢献したと評価できた。

##### 3) ハラスメントFD研修会

FD委員会主催（ハラスメント委員会共同企画）によるFD研修は、株式会社ビズアップ

が提供するオンデマンド動画の視聴と確認テストの受講による研修とした。視聴期間は、2024年2月19日から3月11日とし、全教職員76名を対象として実施した。採用動画は、e-JINZAI for universityの中のハラスメントに関するトピックを教員用と事務職員用にFD委員がカスタマイズした内容のもので、非常にわかりやすく理解につながった、空き時間に視聴でき効率的であったなどの意見が聞かれた。

#### 4) 教職員に向けた研修に関する広報活動

石川県や他県の大学コンソーシアム、他大学等が開催する先進的な教育力向上のFD研修への参加を教員に促し、そこで得られた情報を随時メールにて発信し共有した。これまで、FD委員より外部研修の案内の発信や研修参加への推奨を行ってきたものの、実際に教員が年間にどのくらいの数の研修に参加していたかについては大学全体として把握できていなかったため、教員全体にアンケート調査を行った。その結果、対象者49名に対して回答数は31名、回答率は63%であった。外部研修に参加したと回答した者が97%であり、積極的に研修会の参加している教員がほとんどであった。参加回数としては、0回～25回幅があったものの、1人あたりの平均としては4.55回であり、教員は自己研鑽のために学外の研修に積極的に参加していることが明らかとなった。このように教員がのびのびと自己研鑽の活動ができることは、大学からの個人研究費が充実していること、無料で受けられる研修の機会が多いこと、オンデマンドや遠隔での参加ができる内容のものが増えたことによる移動時間や拘束時間の最小化が利点となっていることがうかがわれた。

### 3. 学生による授業評価の実施

授業評価の実施・評価・分析を実施した。

昨年度、学生委員委員会と合同で授業評価項目を検討し、今年度からはより教員の授業の評価に特化した項目となって開始した。前期と後期の2期に渡って、Moodle「学習管理システム (Learning Management System; LMS)」を用いて、学生による授業評価を実施した。授業評価の結果は、評価アンケートの回収率、各科目・質問項目ごとの得点を集計し、平均得点を一覧表にまとめた。その結果を、前期と後期と2回に渡って教授会にてフィードバックを行い授業改善に活用するように呼びかけた。結果としては、学生の総合的満足の評価は高く、「授業準備」「特色のある教育」の項目が特に高かった。「アンケート回収率」については、昨年度に比べると飛躍的に上昇しているが、教員によって差がみられること、非常勤講師による講義の回答率が低いことが課題としてあげられた。今後、適切な評価を行うためには、回収率の改善は必須課題であり、担当教員と担当事務職員へ回収率の増加に向けた工夫を行うこと、教員自身も学生評価に対する意識を高めるよう周知した。

#### 4.4.1.10 ハラスメント委員会

委員長：真田 弘美 教授

委員：小林教授、岩佐教授、米田教授、紺家教授、塚田教授、中村事務局長

ハラスメント相談員：岩佐教授、田村講師、大江講師

活動内容：

<前年度までの課題>

- ①2022年4月からのパワーハラスメント防止措置の義務化についての学内への継続的な周知
- ②ハラスメントのないキャンパスの醸成

<今年度の目標・年度計画>

- ①パワーハラスメント防止措置として研修会の開催
- ②ハラスメントのないキャンパスの環境整備
- ③ハラスメント事案が生じた場合の適切な対処
- ④性の多様性を鑑みた学内の啓発活動と環境整備

<今年度の活動実績・評価>

- ①新学期のガイダンスで学生と教職員にパワーハラスメント防止措置の義務化と相談体制等について周知した。
- ②ハラスメントの起こりにくい環境として、個室における面談時の入り口の開放を周知した。
- ③FD委員会と合同で2024年1～2月にハラスメント研修（e-learning）を実施した。ハラスメント（疑い）として委員長に3件の事案の相談があったが、提訴者から丁寧に聞き取り、環境委整備等により問題の解消が図られ、検討の俎上には載せる必要がないことを確認した。
- ④性の多様性を鑑みた学内の啓発活動と環境整備に向けて、学生部長と学部長が研修を受講して次年度以降の活動の準備を開始した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- ①ハラスメントのないキャンパスの醸成
- ②ハラスメント事案が生じた場合の適切な対処
- ③性の多様性を鑑みた学内の啓発活動と環境整備

#### 4.4.1.11 コンプライアンス委員会

委員長：小林 宏光 教授

委員：中村事務局長

事務局：林専門員

活動内容：

<前年度までの課題>

前年度までに本学において研究倫理・コンプライアンスに関する重大な問題は生じていないが、これを継続しコンプライアンス遵守の風土を醸成する。

<今年度の目標・年度計画>

研究会の実施など倫理委員会や総務課など関連部署と連携し、教職員のコンプライアンス意識の向上を図る。特に今年度は学内にCOI委員会が新設されたことから、これに関する研修を重視する。

<今年度の活動実績・評価>

令和6年3月1日（金）にコンプライアンス委員会・倫理委員会・COI委員会の合同研修会を開催した。内容は以下のとおりである。

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1. 研究不正防止に関して    | 総務課 外主事          |
| 2. 利益相反（COI）に関して | COI委員長 今井秀樹教授    |
| 3. 倫理申請の変更点について  | 倫理委員長 米澤教授       |
| 4. 確認テストの実施方法    | コンプライアンス委員長 小林教授 |

昨年度は情報システム委員会からの説明があったが、今年度は新設されたCOI委員会からの説明に変更した。当日参加できなかったものへの配慮として、説明会の内容を録画し後日視聴できるようにした。説明会内容の理解を確認するためのオンライン小テストを実施し、合格者に受講証を発行した。3月末までの合格者は教員・大学院生あわせて89名であった。

#### <次年度以降に向けた課題・発展>

研究倫理ガイドラインの変更等は常に生じるので、次年度以降も新たな変更点や課題に対応できるよう研修内容をアップデートしていく必要がある。

### 4.4.1.12 倫理委員会

委員長：米澤 洋美 教授

委員：小林教授、今井（秀）教授（11月迄）、戸部教授、臺教授（1月～）松本（勝）准教授、大江講師、大西講師、中嶋（優）講師

事務局：地藤主査

活動内容：

#### <前年度までの課題>

人を対象とした生命科学・医学系研究倫理指針（令和4年一部改訂）に準拠した倫理委員会の運営体制を整えること

#### <今年度の目標・年度計画>

- ①倫理審査を適切かつ迅速に行い、本学の教員・学生の研究推進を図る。
- ②人を対象とした生命科学・医学系研究倫理指針（令和4年一部改訂）に準拠した倫理委員会の運営体制の下、学生・教員への周知を徹底する。

#### <今年度の活動実績・評価>

##### ①倫理審査の実施

本年度1年間で一般審査件33件、迅速審査71件で計104件の審査を行った。R4年度は78件であり30%あまりの増加であった。

##### ②新倫理審査システムの運用

- ・R5年5月より本学HP画面より倫理審査システムの申請を可能とし、申請の手引き、申請様式等の整備を行った。
- ・厚生労働省研究倫理報告システムに、審査結果を随時UPした。
- ・教育・研修体制として基本および継続研修を定め、倫理審査申請資格と定義づけた。
- ・研究責任者への研究の中止、終了、継続の年次報告について、新システムを通じての報告を義務化した。

##### ③倫理研修の実施

R6年3月1日に学内教職員向けにコンプライアンス合同説明会を行った。この説明会はコンプ

ライアンス委員会、情報セキュリティ委員会と合同開催であったが、倫理委員長が「次年度の変更点について」と題し40分ほど説明を行った。

＜次年度以降に向けた課題・発展＞

R5年3月に倫理指針の一部改訂、R5年7月に施行となっているため、本学の倫理規定ならびに、手順書の見直しを進めており、その早期改定を目指している。

#### 4.4.1.13 衛生委員会

委員長：中村 博之 事務局長

委員：岩佐教授、河合助教、千田助教、外主事、小酒囑託、中川産業医

活動内容：

＜前年度までの課題＞

- ・コロナ禍による行動制限緩和後初の対面による消防訓練の実施
- ・放置傘や破損・放置されたベンチなどの適切な処理

＜今年度の目標・改善点・年度計画＞

- ① 教職員のストレスチェックを実施し、労働環境の現状把握と改善の検討を継続する。
- ② 職場巡視を実施し、学内の衛生管理が適切性の検討を継続する。

＜今年度の活動実績・評価＞

##### 1. 職場巡視

職場巡視前に職員からメールにて情報収集を行ったうえで、3回（6月、12月、3月）職場巡視を実施し、学内の施設・設備等の安全衛生管理が適切か確認した。

##### 2. 定期健康診断

受診状況を調査し、「職員保健だより（春号）」やメールにて職員に受診を勧奨した。

##### 3. ストレスチェック、長時間労働

法人の指示に基づき、職員のストレスチェックを7月18日～8月1日に実施した。

職員（転任、新任を含む）にリーフレット「自分の時間外労働について考えよう 働き過ぎて疲れていませんか？」（衛生委員会作成）を配布した。

##### 4. 防災訓練

防火管理者の主導のもと、職員及び学生の防災訓練を7月13日に実施した。コロナ禍のため新しい生活様式を考慮した訓練とした。地震対応訓練の実施と避難経路や消火栓・消火器、AED、車椅子等の設置場所、消火隊の組織や役割等の説明を行った。

##### 5. 「職員保健だより（春号）（冬号）」の発行

春号では、定期健康診断の受診勧奨、新型コロナワクチンQ&Aについて掲載した。冬号では、インフルエンザウイルスQ&A、ストレスのセルフケアについて掲載した。

##### 6. その他

- ・長期間使用されていない錆びたサッカーゴールやテニスコートの審判台、椅子を危険のない場所へ移動した。
- ・衛生上問題のある放置傘を一括廃棄した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

来年度は消防訓練をコロナ禍前と同水準に戻し実施する。実施に当たって教職員説明会を開催し、各自の役割理解を深め、円滑な実施を目指す。

長年放置され座面の木材や骨組みが腐りつつあるベンチを随時更新する。

#### 4.4.1.14 動物実験委員会

委員長：峰松 健夫 教授

委員：岩佐教授、大貝共同研究講座教授、長谷川共同研究講座准教授、市丸准教授

事務局：久保石主事、外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

本学にて動物実験を実施できる設備および体制の構築

<今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 動物実験委員会の新設
2. 動物実験棟および実験室の開設・管理
3. 動物実験教育の開始
4. 動物実験計画の審査・承認

<今年度の活動実績・評価>

1. 動物実験委員会の新設

昨年度動物実験委員会・微生物安全管理委員会準備委員会に置いて整備された動物実験規定に基づき、本年度動物実験委員会が新設された。

2. 動物実験棟および実験室の開設・管理

・動物実験棟：令和5年12月14日承認

・人間病態学実験室・準備室：令和5年12月19日承認

いずれも適切に管理・運用されている。

3. 動物実験教育の開始

令和6年3月20日現在、6名が受講し、確認テストに合格した。

4. 動物実験計画の審査・承認

3件の動物実験計画を受け付け、いずれも承認した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

1. 動物実験教育の充実
2. 動物実験施設の利用拡大

#### 4.4.1.15 微生物安全管理委員会

委員長：峰松 健夫 教授

委員：今井（美）教授、大貝共同研究講座教授、平居教授

事務局：久保石主事、外主事

活動内容：

<前年度までの課題>

本学にて微生物を安全に管理・利用できる設備および体制の構築

<今年度の目標・改善点・年度計画>

1. 微生物安全管理委員会の新設
2. 微生物等使用・保管施設確認届の受付
3. レベル2微生物等使用・保管届等の受付

<今年度の活動実績・評価>

1. 微生物安全管理委員会の新設

昨年度動物実験委員会・微生物安全管理委員会準備委員会に置いて整備された微生物安全管理規定に基づき、本年度微生物安全管理委員会が新設された。

2. 微生物等使用・保管施設確認届の受付

・看護デザイン科学実験室：令和5年10月12日受付

3. レベル2微生物等使用・保管届等の受付

本年度は申請がなかった。

<次年度以降に向けた課題・発展>

引き続き微生物等使用・保管施設確認届、およびレベル2微生物等使用・保管届等の受付を行い、必要に応じて適正な使用・保管がなされるよう助言を行う。

#### 4.4.1.16 DX推進委員会

委員長：平居 貴生 教授

委員：岩佐教授、紺家教授、垣花教授、市丸准教授、松本（勝）准教授、佐能講師、大貝共同研究講座教授、中村事務局長、上村総務課長、河端教務学生課長

事務局：西野主事

活動内容：

<今年度の目標・年度計画>

- 1) 本学におけるデジタルトランスフォーメーション(以下「DX」という)を推進する。
- 2) 本学教育DX化構想(2023年度～)の計画、準備、実施の支援を主たる活動とする。

<今年度の活動実績・評価>

1. 電子教科書導入の支援（対象：新入学生）

- 1) 電子教科書の導入方法の検討（教務委員会と連携）
- 2) 新入生ガイダンスにおける説明会の実施（4月）

新入生ガイダンス内で電子教科書の使い方などについて説明した。また、情報システム委員会（市丸准教授）、学生委員会（学生ガイダンス担当教員、学年担任）、アカデミックリテラシー担当教員と協議し、新入生が情報端末を使う環境にスムーズに慣れるよう

努めた。

3) 電子教科書に関するトラブル対応窓口（教務学生課）の設置

学生が抱える問題について、教務学生課が集約し、DX推進委員が個々のトラブルに対応した。

4) 電子教科書導入に対する評価

7月にアンケートを実施（対象：令和5年度入学生）

2. 情報端末の必携化に向けた環境整備

1) ICTを活用したアクティブラーニング、グループワークや体験学習、事前・事後学修、オンライン授業の実施、レポート・課題作成に対応可能な情報端末の大学推奨スペックの検討・紹介（対象：令和5年度入学生、令和6年度入学生）

2) 大講義室の改修（電源の確保）

3) 講義室の改修案の作成

委員会にWG（岩佐教授、松本（勝）准教授、佐能講師）を設置し、次年度に向けて2-4年次の学生が使用中講義室改修案を作成した。

3. 教育DX化の構想における令和6年度の「学内講義のデジタル化」、「技術演習のデジタル化」、「病院演習のデジタル化」に向けた計画の立案・準備と実施

1) 学内講義のデジタル化

教務委員会と連動し、教科書の電子化に取り組んだ。1年次の各科目における講義資料のデジタル化の推進するために、教員対象のガイダンスを企画した（Moodleを介した資料の配布方法など）。さらに、情報端末のトラブルに関する学生相談会を年2回実施した（市丸准教授、松本（勝）准教授、佐能講師）。また「学修データの活用による次世代学修計画プロジェクト」を立案し、中期計画推進事業に申請した（WG:佐能講師、大貝共同研究講座教授）。

2) 技術演習のデジタル化に向けた準備

DX教育研究部会（部会長松本（勝）准教授）を中心に、2年次以降の演習科目における教育デジタル化による演習内容と評価方法を検討し、次年度の実施体制を整えた。

3) 病院演習のデジタル化に向けた準備と新たな実習記録システムの導入

DX実習記録部会（部会長石川教授）を中心に、実習記録の電子化に向けて準備した。1年次後期から開始する基礎看護実習から実習記録システムを導入した。

<次年度に向けた課題・発展>

電子教科書に関しては準備期間が少なかったが、教務委員会と連携することによってスムーズに導入することができた。しかしながら、一部の学生はデジタル教材に慣れない、あるいは苦手な学生がいるので、そのような学生に対する適切なサポートが必要である。それらの改善のために教員のスキル向上や学生の意見を取り入れたサポート体制の構築が今後の課題である。

## 4.4.2 特設委員会

### 4.4.2.1 高校生の探究活動支援ワーキング

委員長：垣花 渉 教授

委員：川島学部長、臺教授、佐能講師、中嶋（優）講師、小幡アカデミックアドバイザー

活動内容：

<今年度の目標・年度計画>

- ・本年度新規に立ち上がったワーキング

<今年度の目標・改善点・年度計画>

- ・「総合的な探究の時間」で学ぶ高校生の探究活動を、本学の研究の視点から支援する。
- ・本学の研究力を高校へアピールし、研究を志す高校生に対して本学への入学を促す。

<今年度の活動実績・評価>

- ・研究ミニイベント：オープンキャンパス開催時において、本学教員の研究内容に高校生が触れる少人数制のイベントを企画・開催した。今年度は、7月14日午前と10月14日午前に開催し、約80名の高校生が参加した。
- ・高校生の学術集会体験：本学で9月17日に開催された「第12回国際リンパ浮腫フレームワーク・ジャパン研究協議会学術集会」に5名の高校生が参加し、特別講演やワークショップを聴講・体験した。
- ・フィールドワーク体験：10月28日に教員が企画・運営した海岸ゴミの収集と分析に関するフィールドワークに、2名の高校生が参加した。

<次年度以降に向けた課題・発展>

- ・上記の活動に参加した高校生のイベントに対する満足度は、いずれも極めて高いものであった。そのために、次年度も高校生の探究的な学習を、本学の強みである研究力の観点から支援し、研究を志す高校生へ本学への入学を促したい。



## 4.5 令和5年度 卒業研究論文題目一覧

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目	
人間科学領域 (14人)	木下 采香 陣出 奈瑠 舩岡 怜奈 宮本 滯奈 豆野 友香	高齢者体験キット着用が歩行動作に与える影響	
	船塚 省吾	自己調整学習理論による高齢者の運動支援の検討 —運動習慣のある高齢者を対象に—	
	北村 彩恵	スモールチェンジ活動による野菜摂取量を増やす実践的アプローチ —働き盛りの労働者を対象に—	
	村田 桃子	スモールチェンジ活動が労働者の形態や運動習慣に及ぼす影響	
	泉 愛莉	砂浜を利用したウォーキングの動作特性	
	原 綾乃 山口 未悠 山本 真帆	食物アレルギー (FA) を有していない者が持つFAについての意識 —交友関係に着目した意識調査—	
	剣村 あい	西田幾多郎の喫煙・禁煙行動についての考察	
	西東 果音	「共に考える」とはどういうことか —哲学カフェの進行を通して—	
	健康科学領域 (15人)	荒木野乃可	人口動態指標と福祉・社会保障関連指標との相関について —都道府県別データを用いた検討—
		梶 寿々寧	離婚率に影響する生活時間について —都道府県別データを用いた検討—
菅田日花梨		合計特殊出生率と栄養素摂取量および食品群摂取量との関連について —都道府県別データを用いた検討—	
石黒 凜奈 茶谷 紗紫 中谷 あい 西浦葉乃子		ヒト横紋筋肉腫細胞 (TE671細胞) を使用したミトコンドリア機能修飾と免疫チェックポイント因子の発現に関する研究	
濱口歩乃果 本谷明日香		「はどめ規定」に該当する若者の性知識から推察する次世代の性教育	

領域または科目群	氏名	論文題目
健康科学領域 (15人)	相羽 凜花	牛蒡子抽出エキスとその活性成分アルクチゲニンの新規生物作用の探索
	時国 玲羅	
	野村 春香	
	荒勢 りら	HPVワクチン接種意向の関連要因：キャッチアップ世代若年女性において
加藤 玲音		
羽生 心愛		
基礎看護学 (4人)	鹿本菜々子	患者の動作観察から転倒リスクを判断する時の看護師・看護学生・理学療法士の視点の特徴
	高井美叶子	
	関根 彩里 新川 都	壮年期の慢性心不全患者が働きながら自己管理する中で体験した困難とその対処
母性看護学 (7人)	河野向日葵	特別養子縁組をした養親が夫婦で協同して子への真実告知を行う過程—複線経路等至性モデルによる一事例の分析—
	中橋 奈智	特別養子縁組をした養親が地域から孤立せずに子育てする過程—複線経路・等至性モデリングによる一事例の分析—
	小間 堇	若年女性の子宮頸がん予防を促すための母親への介入効果；スコーピングレビュー
	小山 愛	避妊についての教育活動と効果に関する文献検討
	島田明日華	父親の育児時間と関連要因についてのスコーピングレビュー
	野崎 光来	海外における妊婦の口腔衛生に関するスコーピングレビュー
	河端 里咲	デスカンファレンスの効果と課題に関する文献検討
小児看護学 (3人)	多田里胡奈	日本の学校看護師に関する研究の現状と課題—地域の小中学校の学校看護師と特別支援学校の学校看護師の比較を通して—
	花野 愛実 松井美夏帆	被養育態度、自尊感情、レジリエンスが看護系大学生の精神的健康度に与える影響
	松崎 雅	終末期がん患者のリンパ浮腫に対する圧迫療法の看護実践～看護師3名の語りから～
成人看護学 (10人)	上森 美雨	術後出血の徴候の観察における客観的臨床能力試験(OSCE)評価表の作成
	宮崎 愛	アトピー性皮膚炎において非紫外線光線療法が皮膚に与える影響に関する研究

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目	
成人看護学 (10人)	今村 魁星	初学者を対象とした非対面での直腸エコー教育による技術習得度に対する効果検証：対面教育・遠隔ライブ教育・オンデマンド教育の比較	
	稲實 瑠夏	軽微な組織障害を検出するためのスキンプロットティングを用いたポイントオブケアATP検査の検出試薬の改良と信頼性・妥当性の検証	
	黒橋明日加 武田和日子 福田 未夢	ポジショニングピロー使用によるシーティングの接触圧低減と快適性の検討	
	高松 楓佳 野村 風花	スキンプロットティングによる軽度認知障害スクリーニング法の開発—アミロイドβおよびリン酸化Tauの検出とMCI同定精度—	
老年看護学 (5人)	今井彩也香	長時間の座位で日常生活を過ごす高齢者への立位介入の試み—看護小規模多機能型居宅介護施設でのユマニチュードの実践—	
	相原 令依	看護学生の要介護高齢者に対する家族介護経験—介護経験から得たこと・求める支援に焦点をあてて—	
	小倉 楓	認知症看護認定看護師が行う認知症高齢者への意思形成・表明支援の実態	
	石和日菜美 木村 泰基	外来通院中の慢性心不全患者によるセルフ心エコー実施可能性の検討	
地域看護学 (7人)	石原 亜美 角谷 美幸 寺田 恵理 西 紅羽 橋本 千愛 橋本 知佳 宮下 春菜	地域在住高齢者のeスポーツ体験における効果検証	
	在宅看護学 (5人)	牧野 優花 山形 千春 山本 紀子	A市に暮らす高齢者のフレイルと生活状況、ソーシャルキャピタルの実態
		中 ひとみ 一瀬 千尋	生活状況とフレイルとの関連—A市高齢者の現状—

領域または科目群	氏 名	論 文 題 目
精神看護学 (4人)	澤田 萌愛	看護学生の臨地実習におけるストレス対処に関する文献検討
	柴 愛莉	統合失調症患者を主人公とした映画の視聴が疾患・対象理解に及ぼす影響 —看護学生によるインタビュー調査—
	中田 桃寧	精神看護学領域におけるプロセスレコード教育の実態 —国公立大学の学士課程のシラバス調査より—
	稲原 寧々	諦めが日常化した知的障害をもつ精神疾患患者との関わりの再検討 —プロセスレコードを用いて—